

かぐや姫が残したもの

—— 小さ子説話と昇天説話の視点から ——

菅 原 秀

一 はじめに

『竹取物語』のかぐや姫は、竹の中から翁に発見され、この世にはあり得ぬ早さで成長した。五人の貴公子の求婚にも応じず、さらに帝の愛情に対しては、心を許すものの、求婚には応じることにはなかった。そして地上の人々のさまざまな抵抗もむなしく、天人とともに昇天の日を迎える。

かぐや姫がこの世を訪れることになったのは、本人が翁に「己が身は、この国の人にもあらず、月の都の人なり。それをなむ、昔の契りありけるによりなむ、この世界にはまうで来たりける。」と述べているところから、またかぐや姫を迎えに来た天人が翁に「汝、幼き人。いささかなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助にとて、片時の程とて下ししを、そこらの年ごろ、そこらの黄金賜ひて、身を変へたるがごとくなりたり。かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限り果てぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く。能はぬことなり。はや返し奉れ」と述べているところからも分かるように、天上での行いの何らかの罰としてであった。罰であるから、天人の言う「穢き所」である地上に一定

期間ただいけばよいのかもしれないが、罰の期間には何かをせねばならないとも考えられよう。だとすれば何をなさねばならなかったのだろうか。成し遂げ何かを残して昇天したのだろうか。

本稿では説話の話形を視点として『竹取物語』を考えてみたい。『竹取物語』に多くの話形が見られることはすでに研究され指摘されている。新たな話形を指摘することが目的なのではなく、古来の説話に見られる話形で考えた際、『竹取物語』はどのように考えることができるのかの試論を展開してみたい。

今回特に考えてみるのは、かぐや姫の昇天についてで、視点として用いるのは「小さ子説話」と「昇天説話」の話形である。

二 説話の形態

『竹取物語』にはいくつかの説話の話形を当てはめることができる。便宜的に簡単に整理してみると次のようになろう。

かぐや姫の生い立ち

化生説話 到富長者説話

《小さ子説話》(全体的)

つまどひ

求婚説話(序)

五つの難題譚

仏の御石の鉢	石作の皇子
蓬萊の珠の枝	庫持の皇子
火鼠の皮衣	右大臣阿倍御主人
竜の首の珠	大伴御行の大納言
燕の子安貝	中納言石上麻呂足

求婚説話
難題説話

(末子の成功説話)

御狩のみゆき

求婚説話

天の羽衣

昇天説話 羽衣説話 天人女房説話

富士の煙

地名起源説話

あくまでも便宜的なものではあるが、この整理のように各部分ごとにそれぞれ話形を考えることができる。部分ごとでもさらに五人の貴公子の求婚譚のところで、最後に登場する、五人の中では一番身分の低い中納言石上麻呂足が、少しだけかぐや姫の心を動かしたところなどは「末子の成功説話」がうつつすらと感じられるというように、さらにいろいろな話形が見て取れる。かぐや姫の存在を軸に考えてみると、全体を通じては「小さ子説話」ということができよう。

本稿で特に扱いたいものの一つは、「小さ子説話」である。異常なほど小さく誕生した子どもは、普通でない能力をもち、人々に幸せをもたらすという伝承の型で、昔話によく知られるものであれば、『一寸法師』、『指太郎』、『桃太郎』、『瓜子姫』などのようなものである。

「小さ子説話」は必ず育ての主にたいして、なんらかをもたらしものである。金持ちになるとか、功成り名を遂げるとか、一族が栄え

るといったいわば物質的な幸せをもたらす。ならば、かぐや姫は何かを残したであろうか。

もう一つは、昇天の場面に見られる「昇天説話」である。これは「羽衣説話」「天人女房説話」として、地域の伝承によっては細部にさまざまなバリエーションもあるようだが、天女が羽衣を脱ぎ、水浴しているところを、男が発見し、男が羽衣を隠してしまったため、天女は男の妻となる。天女は子を生み暮らしているうちに、羽衣を発見し、天へ帰るといった話形である。

『竹取物語』で考えてみると、成長していくかぐや姫は地上界に何を残しているだろうか。またなぜ昇天するのであるうか。それら二つの点を中心に検討してみたい。

三 翁に残したもの

厳密には翁媼夫妻に残したものということになる。「三寸ばかりなる人」がこの世にはあり得ぬ早さで成長していくのは、地上の人間界の存在ではなく、存在を神聖視させることにもなる。ここで考えてみたいのは「小さ子説話」としての見方である。

「竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔てて、よごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうやう豊かになりゆく。」とあり、「翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。」とある。そして、かぐや姫と命名後、「このほど三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず呼び集へて、いとかしく遊ぶ。」ともあり、裕福な様子が見られる。

後に、帝がかぐや姫のもとを強引に訪れ、人間ではない「影」の姿を見て、連れて帰ることを断念した際、「さて、仕ふまつる百官の人

に饗いかめしう仕うまつる。」とあるように、翁のこのもてなしようから、相当な財力は持ち得ていることは分かる。

五人の貴公子といった殿上人との、さらには帝との関わりの機会まで得たことなども含め、名譽も物質的な幸せもたらされいる。たしかにかぐや姫は翁に財を残したことになる。

その他、翁には昇天の際に、泣き伏せる翁に「文を書き置きてまからむ。恋しからむ折々、取り出でて見給へ」と言つて、「この国にうまれぬるとならば、嘆かせ奉らぬ程まで侍らで過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそ覚え侍れ。脱ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨て奉りてまかる空よりも、落ちぬべき心地する。」と「書き置きし文」と「脱ぎ置く衣」とを残している。

もつとも、その後翁嬪も、読み聞かせても「何せむにか、命も惜しからむ。誰がためにか。何事も用なし」と病み伏せてしまい、残した物もかぐや姫の望んだような効果はなかったのだが、いずれにしても、かぐや姫は翁に財や物は残している。

四 帝に残したもの

帝に対しては、「かくあまたの人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらしき身にて侍れば、心得ず思しめされつらめども、心強く承らずなりにしこと。なめげなる者に思しめし留められぬるなむ、心におまり侍りぬる。」と書いた手紙、そして「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける」という歌を詠み、壺の薬を添えて、残している。

しかし、帝は「抜け御覧じて、いとあはれがらせ給ひて」とあり、内容は受け取ったものの、「駿河の国にあなる山の頂」で「御文、不死

の薬の壺並べて、火をつけて燃やす」ようにさせた。

不死の薬は洋の東西を問わず王がもつとも所望するところの物であるが、帝はそれを破棄したところに、王権拡充を図る色好みを超えた存在として人物造形されている点については、かつて述べたところである^(注1)。いずれにせよ、帝も翁と同じように、かぐや姫の望んだような納め方はしなかった。

帝は地上界の財や権力を欲しいままにする存在であるから、そういう存在が欲するものとして「不死の薬」ということになるのだろうか、やはり翁への財と同じように物質的な物である。

思い起こすに、物質的側面は五人の貴公子が登場する難題譚のところでも否定された要素であった。

五 残したものの性質① 日常と思い出

こうしてみると、『竹取物語』は「小さ子説話」として、財をもたらずという形は取り得ているのだが、それが話の着地点とはなっていない。財を残された側は、その財を喜び、後々まで幸せに暮らしたとは言えない。むしろ、悲しんでいる。もちろん、財を残されたことを悲しんでいるのではなく、かぐや姫がいなくなることを悲しんでいるのであり、もたらされた財など、全く問題にしていない。

「小さ子説話」というのは、いわば財が幸福という形で帰結すべきなのだが、『竹取物語』では、もたらされた物質的な物は、必ずしももたらされた側の幸福に結びついてはいない。

それでは、かぐや姫は地上界に物質的な物のみを残して、それが地上界の翁や帝に幸せはもたらさなかったのだろうか。何かを残していったのではないか。物質的な側面が幸せに結びつかないというならば、精神的な側面はどうであろうか。

先にも本文を挙げたが、竹の中から見つけ、大事に養育しはじめたあたりで、「翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。」とある。先に指摘した竹から黄金というふうには財を得はじめたことも相まって、喜びの宴まで催している。かぐや姫の存在自体が翁にとっては生き甲斐と化しているくだりである。こうしたかぐや姫の成長を時に心配しながらも喜び見守っていくさまは、「わが子の仏、変化の人と申しながら、こころ大きくまで養ひ奉る心ざし、おろかならず。翁の申さむこと、聞き給ひてむや」や、「この世の人は、男は女に婚ふことをす。女は男に婚ふことをす。その後なむ門もひろくなり侍る。いかでか、さることなくてはおはせむ。」といった女としての行く末を案じるところからも見てとれる。そうした心配に対してかぐや姫が「何事をか宣はむ事を承らざらむ。変化の者にて侍りけむ身とも知らず、親とこそ思ひ奉れ」などと述べるところは、成長過程での思い出として、克明に育てる側にとって残るものとなるう。

これもつかの間に問答の様相を見せながら、無理難題へと話は進むのであるが、貴公子への応対、帝への応対など、かいがいしいまにかぐや姫のための行いに終始する。こうした日常も、悩みつつも、苦になるといよりはいいいきと幸せな日々なのに違いない。ただ、これは地上界の物質的な幸せに向かっていくことなど翁には知るよしもないところに悲劇はあるのだが。

そして、七月十五日から「せちにもの思へる気色」となりはじめ、八月十五日ごろになると「層物思ひもつのった様子で泣くようになり、翁の「あが仏、何事思ひ給ふぞ。思すらむこと、何事ぞ。」との問いに、「さきさきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。それをな

む、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける。今は帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かの本の国より、迎へに人々まうで来む。さらずまかりぬべければ、思し嘆かむが悲しきことを、この春より思ひ嘆き侍るなり」と告白をする。

また、昇天前の物思いにふけるあたりでは、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国には、あまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のことも覚えぬ。ここには、かく久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり。いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。されど、おのが心ならずまかりなむとする」と、別れの悲しみとともに感謝を述べている。

帝についても「かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はさせ給ふ。御返り、さすがに憎からず聞え交はし給ひて、おもしろく、木草につけても御歌を詠みてつかはす。」とあり、「かやうにて、御心を互ひに慰め給ふほどに、三年ばかりありて」と、心通わす幸せな日々が残された。

このように昇天に到るまで、手塩にかけて育てたかぐや姫は、翁嫗に対しても、心を許し交わした帝に対しても、精神的な側面での幸福、思い出を残してはいる。

しかし、こうした幸せな思い出は、昇天による別れによってすべて水泡に帰すことになってしまう。挙げた本文も悲しい別れを表すのが主であって、感謝やねぎらいの言葉も、悲しみを増す効果が大きい。後々思い出してと言うならばよい思い出ともなるかもしれないが、そう推測はできるにしても、言われたところで嬉しさより悲しさが先立つようになっていく。

六 残したものの性質② 「心ざし」

かぐや姫が残したものを考えるに当たって、もう少しかぐや姫は地上で何をしたのか、ひきつづき検証してみたい。特に目を引くのは、かぐや姫が五人の貴公子に対して結婚の条件として難題を出したところである。

かつて、五人の貴公子が登場する所謂難題譚について述べたことがある^(注2)ので詳細は省くが、かぐや姫にこの世に存在しない宝の持参を条件にされ、全員失敗に終わり、失敗談としては共通しているが、しかし、極めて巧妙に対照関係が駆使され、主題の具体化に向かって書き進められている。対照の関係によって異なるものを導きだし、それを転換させながら連結し、それを使ってまたさらに対照の関係を使って異なるものを導き出している。

この難題譚の前の「つまどひ」のところのかぐや姫と翁の会話のやりとりで、結婚を願う翁に対し、かぐや姫は「世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らずは、婚ひがたしとなむ思ふ」と不安を見せ、翁は五人の方々はそれぞれに「心ざしあらむ人」であると言う。そこでかぐや姫は「何ばかりの深きを見むと言はむ。いささかの事なり。人の心ざし等しかんなり。いかでか、中に劣り優りは知らぬ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらむに、御心ざし優れたりとて、仕うまつらむ」との考えを述べている。重要である「心ざし」は五人の貴公子とも優れていて甲乙つけがたいので、見たいと思っている物を見せてくれる人を「心ざし」が優れている人と判断しようという、いわば宝が「心ざし」の証という内容である。それで無理難題の提示とつながっていくのであるが、あり得ぬ物を条件として、提示された者たちの反応を見ても、一見すると姫の断りの口上、非情さの現れと受け取れる箇所でもあるし、指定された宝の持参のみが条件のようである。

しかし、ここで出てきているのは「心ざし」と「ゆかしき物」の二つのものである。考えてみれば、姫と翁のやりとりで相手に対して重要視していたのは、「深き心ざし」なのである。「ゆかしき物」については結婚は拒否したいが、翁に背くわけにもいかないという状況で、いわば強引にひねり出されたものに過ぎない。見たいと思っている物がこの世に存在せぬ宝であるということならば、仮に相手を選ぶとすれば、残されたのは当然「深き心ざし」なのである。

五つの話が対照という関係を駆使しながら書き進められていったのは、この「心ざし」というものの具体的なありようである。

難題譚の構造に従うと、共通性の奥に様々な対照の関係を使いながら、前の皇子二人とで、人を欺こうとするがしこい人間性をあぶり出し、右大臣で万事鷹揚としてずるがしこくはなく悪いとはいえない人間性によって次につなぎ、続く大納言と中納言で、一面では魅力的ですらある人間性に到達させている。

特に五人の中では最良の人格を持つ中納言石上麻呂足が、五人の中ではかぐや姫の心を「少しあはれ」とまで動かすことができている。

五人の貴公子の後に登場する帝は、方法はともかく翁の屋敷へ出向き姫の前に到達し姿を見、さらには「影」というかぐや姫の人ではない姿を目の当たりにし、それでも愛することができるところに、かぐや姫の前で「心ざし」を示すことができている。そこで「御心を互に慰め給ふ程に、三年ばかりありて」と、心通わす幸せな日々が残された。

五人の貴公子が登場する難題譚を通じて、かぐや姫は、権力や財を、あざ笑うかのように完全に否定し、「心ざし」という人間にとってもっとも尊く大切なものを重要視している。

こうしてみると、この「心ざし」とは、もちろん物質的な幸福ではなく、いわば前の項目の思い出のたぐいとも異なる精神的なものである。

七 昇天のわけ

かぐや姫は、先に挙げたようにもろろ物も財も残した。いわば物質的な幸せは残した。しかしそれだけではなく思い出も残し、難題譚を通じては、「心ざし」という人間界で大切なものを示して見せた。

翁には成長していく間に思い出を、帝には心通わす期間、さらには五人の貴公子では到達し得なかった、人ではなく「影」をも愛せるような、「色好み」を大きく超えた、理想の「心ざし」を持たせた。それはいわば精神的側面のものである。

それでは、翁も帝もそれを理解し、さらには、地上界は精神性を重視した幸せな日々になったかというところではない。昇天は悲しみが描かれている。かぐや姫が残す精神的なものは、すぐにその場で理解できるものばかりではない。翁にかけた言葉、帝と心を通わすことなどは、その時に幸せを与えるものであるが、それも昇天によって消えてしまう。

では、かぐや姫は精神的な幸福、思い出を残し、「心ざし」の尊さを示しながら、昇天時にすべて消してしまったかというところではない。かぐや姫は確実に地上界に精神的なものの痕跡を残している。

かぐや姫が難題譚で残したのは、物質的な物による幸福を否定し、「心ざし」の大切さである。この要素はその後の昇天までずっと受け継がれていく。

しかし、昇天を阻もうと翁が行ったのは、帝への依頼、そして天人に対しては何とも稚拙な嘘による舌戦である。もちろんこれが追い詰められた人間の最後の抵抗のようで涙を誘うのは確かである。

帝が行ったのは、「かの十五日、司々に仰せて、勅使には少将^(注3)

高野大国といふ人を指して、六衛の司あはせて二千人の人を、竹取が家に遣はす。家にまかりて築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々

多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も、弓矢を帯してをり。屋の内には、女ども番にをりて守らす。」という、地上界ができる最大限の抵抗である。しかし、これは物質的な意味での最たるものである。物質的な側面は、難題譚以来ずっと否定されてきた要素である。否定されてきた物でしか抵抗できないというのは何とも悲しく人間的な行いと言える。

したがって、かぐや姫が昇天してしまうのは、当然の帰結となる。考えてみれば、翁はかぐや姫を得て以来、慈しみ育てるうちに、財を得、殿上人とも関わり、はては帝とも関わりを持つに到っている。地上界の物質的な幸せを完全に享受しているのである。

かぐや姫は昇天し去るしかないのである。

八 昇天してこそ残るもの

かぐや姫は難題を出し、五人の貴公子の求婚を拒んだ。帝にも結果的には拒むことになった。『竹取物語』にある難題の形はそれだけではない。

帝も難題を出している。内侍中臣房子にはかぐや姫を連れてくるよう、翁にはかぐや姫を差し出せと、そしてかぐや姫には結婚せよと命じている。難題を出していたかぐや姫にも難題が降りかかっている。

さらにかぐや姫に降りかかる難題は、前に本文を挙げたが、七月十五日頃から始まる「物思ひ」に如実に見て取れる。

この点については、「このかぐや姫の物思ひは二重の意味がこめられていることに注意して欲しい。つまり、前半部分に描かれている月の世界を、そこに住んでいる父母を慕う物思いと、地上の竹取翁夫妻との別れによる物思いと、二つの物思いが、かぐや姫の苦悶と哀愁を形成しているのである。」^(注4)との指摘もある。

指摘をもとに、さらに考えてみると、かぐや姫が重視した「心ざし」など、人間の好ましい部分の意味からすれば、この二重の物思いのそれでは、両方とも大切にすべきことである。そして、それらがせめぎ合うことが、さらに深刻な物思いにつながっているのである。いわば人間界で見つけた尊い情愛によって、現象が難題と化してしまっているのである。

こうした、よかれと思うことの狭間で煩悶するという、極めて人間的な姿をかぐや姫は見せている。

ではなぜ地上に残ることを優先せず去ってしまったのか。地上に残り、育ての親である竹取の翁媼に報いて幸せに暮らすべきではないのか。やはり天人としての運命なのかも考えられるが、いずれにせよ昇天してしまう。地上界人間界で見いだした尊い情愛を真つ向から否定するかのようになってしまう。

それに、物質的側面を否定してきたかぐや姫が、昇天の際に、「不死の薬」や「手紙」という「物」を残すというのも、意味ありげだが、この点については稿を改めたい。

前項で述べたように、もちろん物語は昇天せねばならない理由を天人であること以外に用意している。それは先に示したかぐや姫の昇天を阻もうとする翁や帝の抵抗手段が、否定してきた物質的要素の最たるものであったためでもある。

しかし、さらにもっと大きな理由があろう。昇天し去ることによって尊い概念が地上界に残るのである。

自身の存在という物質ではなく精神を残すのである。精神を残すために自分が選んだ手段、それが昇天なのであり、自分が消えることで大切な物を刻印していくのである。

九 終わりに

かぐや姫の昇天後の翁媼はただ涙にくれて病み伏している。

しかし、帝は、これも前に本文を示したが、富士山頂で不死の薬も手紙も燃やし、破棄してしまう。物質的な幸福を拒否したのである。

これはかぐや姫が確実に残すべきものは残して去ったこと、残したものが受け取られたことの現れのようにさえ思えるのである。

やはり物質的より精神的、物より心を重視した姿を、昇天し、消え去ることで残したと解するべきであろう。

かぐや姫という存在は地上の人間界においては、人間界のもっとも尊いもの、尊いあり方を写す鏡のようなものとなっている。かぐや姫が地上の人間界で得て写し出したものは、「心ざし」に代表されるような人々を思いやる心である。しかし、かぐや姫に写されても人間にはすぐに理解はできない。人間は富や財に目を奪われてその尊さに気づいていない。登場人物には理解できてはいないという書き方になっている。

少なくとも、不死の薬も手紙を破棄したことから、唯一帝には通じたかとも思わせるが、それもどうだろうか。

いずれにせよ、理解できない登場人物の嘆き悲しみを配置することは、感情移入させるだけではなく、むしろそれを客観的に俯瞰できるようにになっているとも言えよう。その俯瞰の立場をとれる読者には理解して欲しいと訴えているようですらある。

注

引用した本文はすべて室伏信助訳注『新版竹取物語』角川文庫平成十八年八月二十五日五版によった。

1 拙稿「『竹取物語』の帝像」弘前学院大学文学部紀要第四四号（二〇〇八年三月二十五日発行）

2 1に同じ。及び「『竹取物語』難題譚の構造——対照によってもたらされる主題について——」全国大学国語国文学会平成十九年度冬季大会口頭発表。

3 この箇所「小將」を、物語中で後に登場する「中將」と同一人物とし、誤写とする説もあるが、引用本文の訳注者の方針にしたがい、「少將」のままとした。

4 三谷栄一『鑑賞日本古典文学第六卷竹取物語宇津保物語』（角川書店、昭和五十八年五月三十日第五版、一九五頁）